「ルカの福音書」について

はじめに

聖書にはイエスの生涯とその教えを書いた「福音書」が４つあり、それぞれ著者の名前をとって「マタイの福音書」、「マルコの福音書」、「ルカの福音書」、「ヨハネの福音書」と呼ばれています。４つの福音書はイエスをそれぞれ違った観点から観察し描いています。４つの福音書のすべてを読むことによって、福音書が描くイエスの全体像を得ることができます。

しかし、最初から４つの福音書のすべてを読み、それを統合して考えることは、はじめて聖書を読む人には、難しいことなので、「ルカの福音書」から読みはじめ、次に、同じ著者が書いた「使徒の働き」を読むとよいでしょう。それによって紀元前４年から紀元後60年までの歴史の中に働かれた神のみわざを順を追って見ることができ、聖書に書かれている救い主イエス・キリストの生涯と、キリストが建てられた教会の発展の記録が、たんなる物語ではなく、歴史の事実であることを知ることができるからです。そして、歴史の中で働かれた神が、私たちの人生にも働いてくださることを確信できるようになるでしょう。

マリアの福音書

マルコの福音書には、イエスの誕生の記事がまったくなく、ヨハネの福音書はそれを抽象的な言葉で描いています。マタイの福音書はユダヤ民族の始祖アブラハムからヨセフに至る系図が書かれ、イエスがヨセフの子として生まれたことが書かれています。マタイには、多くの人に知られているクリスマスの情景はほとんど書かれていません。

ところが、ルカの福音書では、イエスの先駆者となるバプテスマのヨハネが祭司ザカリヤと妻エリサベツの間に生まれた次第や、御使いが未婚のマリアに現れ、聖霊によって神の御子を宿し、産むことを告げたことなどが詳しく書かれています。御使いのお告げののち、マリアがエリサベツを訪ね、エリサベツから祝福を受けたことや、それに答えてマリアが歌った賛歌なども記されています。そして、イエスがベツレヘムの家畜小屋で生まれ、羊飼いの礼拝を受けたこと、神と人とに愛されて成長したことなどが事細かに書かれています。

ルカはこれらの情報をどこから手に入れたのでしょうか。考えられるのは「母マリアから」です。イエスを宿し、産み、育て、生涯身近にいた「母マリア」以上にイエスを良く知る人はありません。ルカの福音書は「マリアの福音書」と呼んでもよいほどに、マリアの証言で満ちています。その全体は、母が子を語るような優しさに包まれています。ルカの福音書が多くの人に愛されているのは、そのゆえだと思われます。

たとえで描かれた福音書

イエスは「たとえ話」を使って、神の国の真理を人々に教えました。福音書には「たとえ話」が39あります。そのうち、マタイの福音書、マルコの福音書、ルカの福音書の3つのすべてに書かれているのは7つ、マタイの福音書とルカの福音書に書かれているのは3つです。マタイの福音書やマルコの福音書にしか書かれていないものは10ですが、ルカの福音書にしか書かれていない「たとえ」は17もあります。ルカの福音書には39の「たとえ」のうち27の「たとえ」が書かれていることになります。ルカの福音書は「たとえ話」の宝庫です。

多くの人に知られている「良いサマリア人」のたとえ（10・30～37）と「放蕩息子」のたとえ（15・11～32）は、ルカの福音書にしか書かれていません。ルカの福音書がなかったら、このふたつのたとえも伝えられなかったのです。

イエスの「たとえ話」は「ストーリー」ですが、それは現実からかけはなれた「物語」ではありません。どれも日常よく見られた出来事に基づいており、それを反映しています。人々の生活に根ざしたイエスの教えは、21世紀の今日の私たちにもあてはまるものです。イエスの「たとえ」や他の教えは、時を経ても変わらない真理を伝えています。

それによって、すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていただきたいと思います。（4）

「すでにお受けになった教え」というところには、バプテスマを受けるための準備教育を意味する言葉が使われています。ルカがこの福音書を献呈した「テオフィロ」は回心したばかりの人で、バプテスマに向けて準備をしていたようです。ルカはテオフィロが口頭で聞いた福音を文書で確かめることができるようにとこれを著しましたが、そのおかげで、今日の私たちも一世紀の人々と同じ福音を聞くことができるのです。

当時、書物を作るには大きな労力と財力が必要でしたが、テオフィロがルカが福音書を書き著すのを支援したと思われます。「テオフィロ」という名には「神を愛する人」という意味があります。神が遣わしてくださった救い主をもっと知りたいと願って福音書を待ち望み、それが完成するために支援を惜しまなかった「神を愛する人」がいたので、この福音書ができたのです。もちろん、聖書のすべては神の霊感によって生み出され、神の力に守られて今日まで伝えられてきたのですが、同時に、聖書は様々な歴史的状況の中で書かれ、守られ、次の世代に受け継がれてきました。そして、ルカの福音書の成立のために「神を愛する人」テオフィロが大きな貢献をしたように、かつても、今も、神の言葉が広まっていくためには、神の言葉を語る人々ばかりでなく、それを求め、御言葉の働きを支援する「神を愛する人」が必要なのです。

祈り　主よ。私たちに福音を遺してくれた人々のゆえに、あなたに感謝します。

御霊によって荒野に導かれ、四十日間、悪魔の試みを受けられた。（1〜2）

この箇所は「聖霊がイエスを試練に遭わせた」と言っているかのようです。マルコ1・12には「それからすぐに、御霊はイエスを荒野に追いやられた」とあって、聖霊が、まるで動物に鞭をあてて駆り立てるように、御子を荒野の試練の場に「追いやった」と書かれています。これは、聖霊が御子に対してさえ主権を持っておられる神であることを示しています。イエスを荒野に導かれた聖霊は、同時に、イエスのうちに「とどまって」（ヨハネ1・32〜33）、イエスと一緒に荒野に向かわれました。聖霊は、荒野でもイエスと共にいて、悪魔の試みにに遭ったイエスを助けました。

イエスが過ごした荒野の四十日はイスラエルの荒野の四十年を表します。イスラエルは荒野の四十年の間、神につぶやき、逆らいました。彼らは「神を試みた」のです。神が人を試みることがあっても、人が神を試みることは許されません。イエスは「あなたの神である主を試みてはならない」との御言葉によってサタンを斥け、イスラエルの四十年の不従順を贖われたのです。

イエスはこのことを「聖霊に満ちて」成し遂げました。そして、それを成し遂げた後は「御霊の力を帯びて」ガリラヤに帰りました（14節）。私たちも聖霊の満たしと力なしには誘惑に勝ち、主のわざを行うことができません。イエスは、ご自分に従う者に聖霊の満たしと力とを約束しておられます（ルカ12・11〜12、第一ペテロ4・14）。主に求め、それを得ましょう。

祈り　主よ。あなたに宿った聖霊が私たちにも与えられていることを感謝します。

収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。（2）

十二弟子の他に七十二人が選ばれ、病人を癒やし、悪霊を追い出す権威が授けられ、宣教に派遣されました。十二弟子たちだけではイスラエルのすべての人に宣教することができなかったからです。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい」（2）と言われている言葉は、全世界七十億の人々に福音を伝えなければならない今日、もっと真実なものとなっています。福音を伝えるのは少数の宣教師、牧師、伝道者だけでできることではありません。キリスト者の数が相対的に減少している現代、すべてのキリスト者が、それぞれ自分の置かれた場所で福音を証しする必要があります。

しかし、実際には、ほとんどのキリスト者が、自分は福音を語ることができるほど立派ではないと考え、福音を証しすることをためらっています。しかし、福音は、自分の立派さで証しするものではありません。キリストがふさわしくない者を愛し救ってくださったことが福音なのですから、自分の名が天に書き記されていることを知り、喜ぶことができる人は、誰でも、福音を証しすることができます。私たちはまだ不完全な「幼子たち」（21）です。しかし、その幼子たちに、救いの恵みが明らかにされているのです（23、24）。この幸いを証しするなら、きっと主を見出す人が起こされるでしょう。

祈り　主よ。私たちを「収穫のための働き手」としてください。

「この人もアブラハムの子なのですから。」（9）

イエスは中風の人に「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪は赦された」と言い（マタイ9・2）、長血を患っていた女性に「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」（ルカ8・48）と言いました。イエスが自分よりも年上の人たちに「子よ」「娘よ」と呼びかけているのは不思議ですが、イエスは、「アブラハムの子」、「サラの娘」という意味で、そう呼んだのです。

ユダヤの人々は「自分たちはアブラハムの子だ」という誇りを持っていました。アブラハムが神の選びにあずかったように、その子孫である自分たちも、同じ選びにあずかっていると自負していました。しかし彼らはザアカイのような取税人はもはや「アブラハムの子」ではないと考え、そうした人たちを軽蔑していました。ですから、イエスがザアカイの客になったとき、人々はザアカイのみならずイエスをさえ非難したのです。しかし、イエスはザアカイが悔い改めを表明したとき、「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから」と言いました。血筋や民族の誇りがその人を「アブラハムの子」にするのではなく、アブラハムと同じ信仰を持つ者、アブラハムと同じように神に信頼する者が「アブラハムの子」だからです。イエスに癒しを求めた中風の人や長血を患っていた女性は、その信仰によって、ザアカイは悔い改めによって「アブラハムの子」となったのです。

祈り　主よ。常にあなたに聞く心を私たちにお与えください。

「試し読み」はここまでです。

お気に入りましたら

ご注文ください。

Penguin Club
www.penguinclub.net